Dawn Border
洲上広司
曽呂利物語
「耳切れうん市が事」より

「多くの怨念が渦巻いている。
違う、お前達ではない。
私の弔いで成仏できぬなら、
修羅道を彷徨い
畜生道に落ちるがよい」

「痛い、目が焼けるようだ。
ここは何処だ。
お味方はいないのか」
「お静かに、近くに敵衆がおりまする」
「女？、こんな戦場に誰なんです」
「私の声を頼りにお進み下さい。
本陣までご案内いたします」

「近くの百姓ですか、名は何と申されます」

「恵順にございます。
貴方様はご領主様のお身内とお見受けしましたが」

「いかにも。
とは言えお家の一大事と遁俗したばかり。
私には雲一と呼ばれる方が居心地よいのです」

「小川がございます。
お目を洗われるとよいでしょう。
お気をつけください、
傍らに花が咲いております」
「花ですか、何の花です」
「赤き彼岸花にございます」
「ああ、
この目はもう二度と
花を愛でる事はない」
「悲観なさいますな、
無事戻られれば医者に診てもらえましょう」

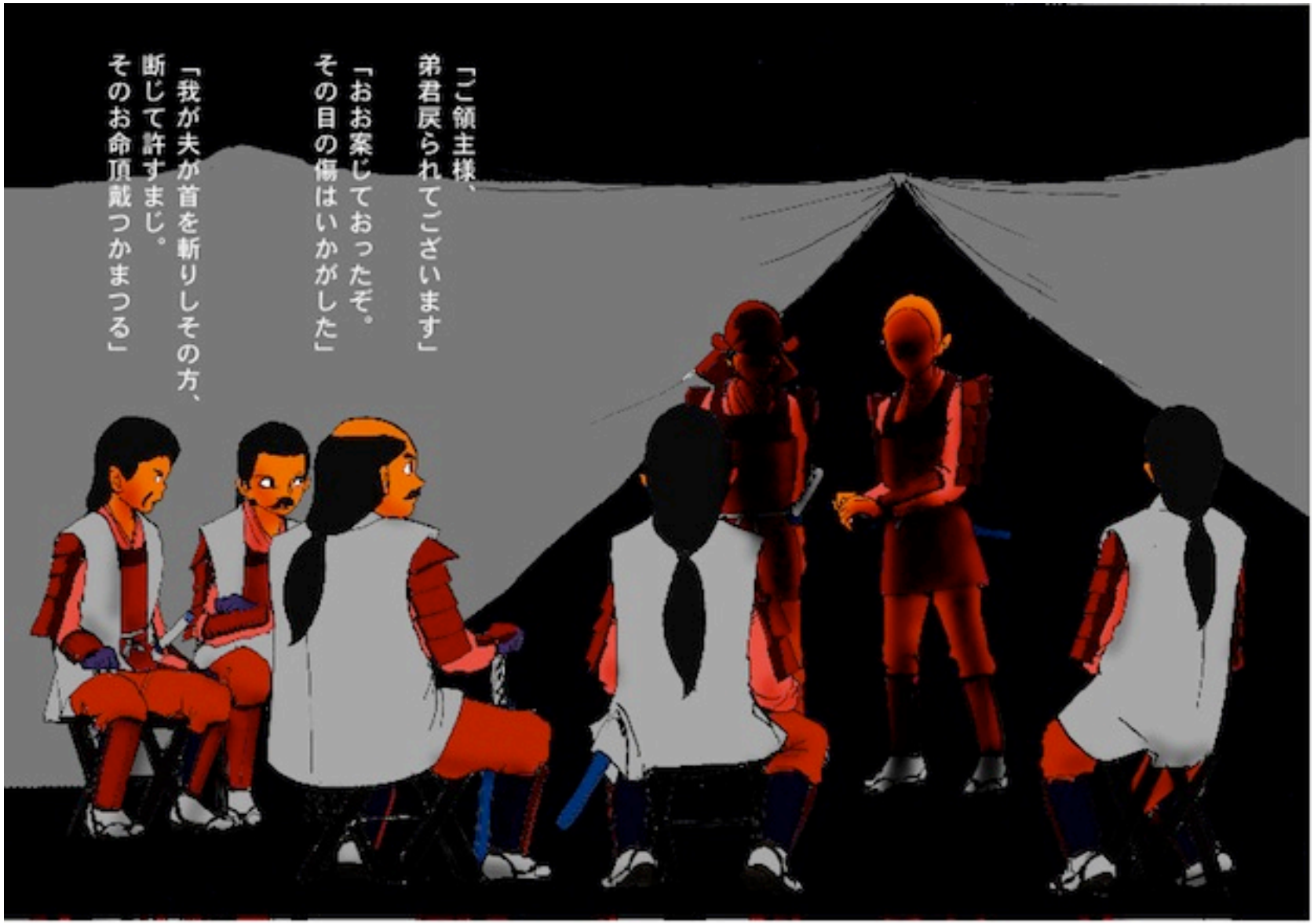
「雲一様、
そう言えば太刀を逆に挿しておられますが」

「筆や箸は厳しく躾けられたのですが、
私は剣術を習った事がありません。
右手では太刀が上手く抜けぬのです」

「左手なら太刀を抜けるのでございますか」

「いいえ、
結局抜けず咄嗟に種子島を掴んだのです。
あれは逆に構えると、
目の前で火花が散るのですね」

「お立ち止まり下さい、足元に兎の骸がございます」
「兎ですか？、
今日この戦で多くの者が骸となったと言うのに」
「小さきとは言え命あるもの。
死者を敬うは兎も人と同じにございましょう」
「恵順さん、貴方はお優しい方だ。
仏に仕えていた身として私は恥ずかしい」
「いいえ、決してそのような事はございません」


「ご領主様、
弟君戻られてございます」
「おお案じておったぞ。
その目の傷はいかがした」
「我が夫が首を斬りしその方、
断じて許すまじ。
そのお命頂戴つかまつる」

「尼寺に入り菩提を弔う事がどれほどの慰めになろう。世を儚んで身は果てようとも、怨念は残るのじゃ」
「ご領主様お下がりを。様子がおかしうございます」
「お覚悟」

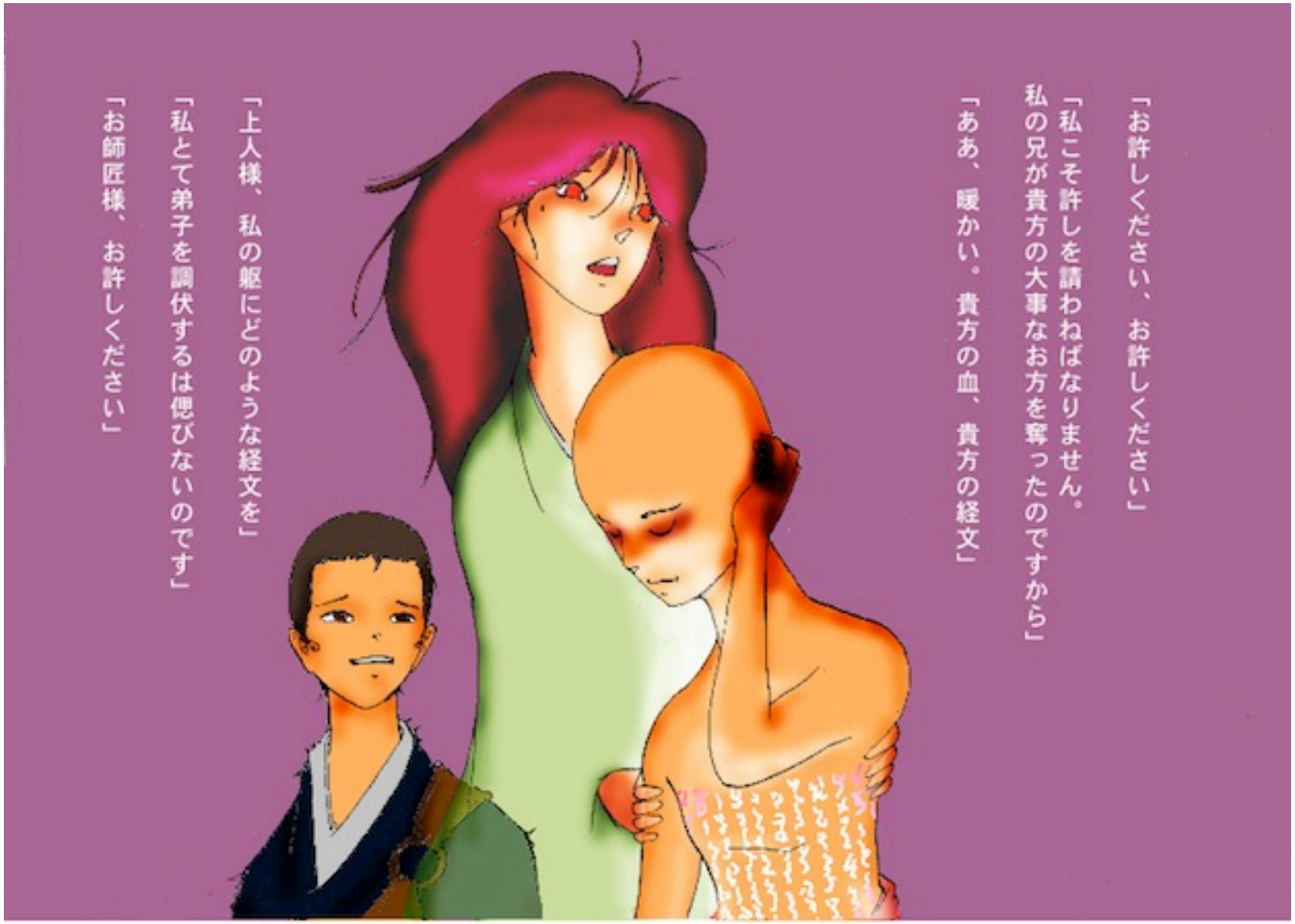
「どういう事だ、なぜ儂を襲う」
「弟君とは言えご領主様に斬り掛かるとは不届きな。直ちにその首落しましょう」
「暫し待たれよ」
「誰だ」
「そのお方は正体を失っておられるだけ。落ち度はございませぬ」

「実の兄に斬り掛かったのだぞ」
「両の目が潰れておりまする。
これで如何に斬り掛かれましょうや。
このお方には怨霊がとり憑いて
おられます」
「怨霊などと戯けた事を申すか」
「お見せいたしましょう。
躯に経文を書きます故、鎧をお外し
くだされ。
このお方から出てゆけ、恵順よ」

「口惜しや、口惜しや、敵を目の前にしながら。仇討ちが叶わぬならば、子や孫の代に至まで、その血絶えるまで呪い続けてやろう」
「恐るるに足りませぬ。こうなっては小太刀一つ振るう事もできませぬ。
恵順、寺ではお前を弔う百万の念仏を唱えておる。だが、お前が怨霊となるならば、この私が弟子のお前を調伏せねばなるまい」

「お待ちください上人様。
恵順さんはそのような
お方ではありません」
「災いなす怨霊にございます」
「美しき花を愛で、
小さき命を慈しむ、
そんな方が怨霊であろう筈が
ありません。
ただ悲しみがあまりに
深いだけなのです」

「貴方の悲しみを補うには
足りぬだろうが、
どうか私の失った耳に免じて、
ここはおさめてもらえませぬか」
「雲一様、お耳を」
「これが私の業なのでしょう」
「ああ、何と言う取り返しのつかぬ事を。
私には詫びる術がございません」
「いいえ、私はもう十分に貴方の恩を受けました」



「お許しください、お許しください」
「私こそ許しを請わねばなりません。
私の兄が貴方の大事なお方を奪ったのですから」
「ああ、暖かい。貴方の血、貴方の経文」

「上人様、私の躯にどのような経文を」
「私とて弟子を調伏するは偲びないのです」
「お師匠様、お許しください」

「ご領主殿、
これに懲りて今後は無益に
人を殺めぬがよろしいでしょう」
「こ、心得た」